

「HSK 季刊わたぼうし」 第44号

発行者:わたぼうし連絡会  
発行日:1997年(平成9年)11月10日 '97 秋号

第44号のテーマ 「MROラジオ・メイトフレンティ」

ボランティア 素朴な汗が 流れ落ち 比呂雪

この機関誌は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

## 特集・MROラジオ・メイトフレンティ

このコーナーで掲載されている「メイト・メイトフレンティ」は、北陸放送ラジオで毎週金曜日の夜放送されているものです。この番組に出演された障害者と健常者の交流団体「ほほえみの会」の方よりご好意で提供していただきました。

### 障害者と健常者のネット・ワークを結ぶ「ほほえみの会」

#### ・飯田 康宏さん

Q. さっそくなんですけど、飯田さんはお仕事のことについてお話しして下さるんですね。車いすに乗っていることで仕事面でもいろいろと苦労されていると聞いていますけれど。

A. はい、10年前に交通事故に遭いまして、それからずっと車いすの生活です。車いすを常に使っていて杖歩行ができない僕を、雇ってくれる企業はほとんどないだろうと考えて、障害者職業訓練学校に一年通いました。そこで、トレースとパソコン技術の資格を取り、卒業と同時にある企業に入社したのです。

Q. 今も、そこで働いているんですか？

A. いいえ、実はその会社は4年前に倒産してしまったのです。

Q. そうなんですか。でも、それだけ資格を持っていれば、すぐに就職先が見つかったのではないのでしょうか？

A. いいえ、それが見つからなかったのです。僕がどれだけ国家資格を持っていても、単なる障害者としてしか見てもらえず、就職することでは健常者と同じラインに立たせてもらうこともできなかったのです。

Q. じゃ、今は働いていないんですか？

A. いいえ、それから一年間は仕事を探し、今は外注という形である設計会社の図面を書いたり、訂正するという仕事を在宅でしています。

Q. 資格を生かして、ついに独立ができたわけですね。

A. そうなんです。

Q. そうなると、飯田さんが書いたり、訂正したりした図面はどうするのですか？

A. 僕は車の免許を持っているので、会社の前まで自分で運転手して行くんです。しかし、車いすを使っているんで階段を昇ることができません。下の玄関の前に付いたら担当者の方に電話をして。「今、玄関の前まできましたので、申しわけありませんが、下まで降りてきていただけませんか。」と、お願いして図面などを取りに来ていただいているのです。そのために、今は携帯電話は欠かさず持ち歩いているのです。

Q. なるほど、自分でできることだけをして、どうしてもできないことだけを人をお願い

するということですね。

A.はい。障害者にできること、できないことがあるというのは。健常者に得意なこと、不得意なことがあるのと同じだと思うのです。障害者が健常者と同じラインに並ぶためには、努力と工夫を重ねることが必要だと思います。

Q.ふうん。私たち健常者や企業の多くは障害者に対して誤った思い込みをしてしまっているのかも知れませんね。

A.そうですね。障害があるから何もできないだろうとか、身の回りのことを何でもして上げなければならない、と持っているようです。

Q.それでは私たち健常者は、その人がどんな能力を持っていて、どんな才能があるかということをしっかり見極めて、それを生かす仕事をどんどんしてもらうことを考えなければいけませんね。

A.そうです。僕たち障害者も仕事に対する喜びと誇りを見つけていかなければならないと思っています。そして、自分ができること、できないことをしっかり判断して、できることは率先して実行する。できないことは恥ずかしがったり、意地を張ったりせずに「お願いします。」と助けを求める。そうやって、お互いに助け合うという気持ちを常に持ち続けていくことが、本当の意味でのバリア・フリー社会、つまり壁のない社会を作っていくと思うのです。

Q.そうですね。まず、私たちからそういう努力をしていきましょうね。飯田さん、ありがとうございました。

A.ありがとうございました。

Q.ところで飯田さん、最近、何かに力を入れてやっていると聞いたのですけれど？

A.障害者の人たちが社会参加をする手助けができれば良いなあ、と思い活動しています。

Q.具体的にどういう活動ですか？

A.今は車いすマップづくり、障害者の人たちが使うブックづくりのことを考えて行動しています。

Q.飯田さんの活動が実を結んで、障害者の人たちが住みやすい社会が早くできると良いですね。

A.そうですね。

・重島 和枝さん

Q.重島さん、こんばんわ。

A.こんばんわ。

Q.さて、重島さんは家族と暮らす中で障害者の自立ということですがけれども、重島さん  
はご両親と同居しているのですね。

A.生まれつきの障害で松葉杖を使って生活をしています。実は両親は飲食店を営んで  
いて、1,2階がお店で3階で暮らしているのです。

Q.それじゃ、重島さんは、お店をお手伝いしているのですか？

A.いいえ、私は役場に勤めていますので、普段は手伝いをしていません。

Q.それじゃ、昼仕事をしている重島さんと家族との生活はずいぶん違いますよね。

A.そうなんです。私が夕方、仕事を終えて帰ってきてからは、両親が仕事が終わるま  
で一人であることになります。

Q.それじゃ、家事はどうしているんですか？

A.恥ずかしい話なんですけど、両親にしてもらっています。夕食もあらかじめ母が準備し  
ておいてくれたものを食べています。掃除なども、自分の部屋はしているのですけれど、  
他の部屋は汚れが目立つときに、ちょっと掃除機をかけるぐらい何ですけれど。

Q.そうなんですか。

A.ただ、何をしても他の人と比べると時間がかかるのです。以前、洗濯をしたことが  
あるのですけれど、私の家は洗濯機も物干しも一階にあるのですよ。まず、洗濯物を持っ  
て三階から一階まで降りていくのが大変なんです。

それから、洗濯を干すときに、松葉杖を使って体を支えながら高いところに干すとい  
うことがすごく難しいです。結局、母に手伝ってもらったのです。自分が何かし  
ようとすると、人の手を煩わせてしまうのですよ。だから、何もしていない方が、周囲  
に迷惑をかけないで済むと考えてしまいます。

Q.気持ちがあってもできないというのは、何だかもどかしいですね。

A.そうですね。逆に私もそれに甘えていたところがあったと思うのです。

Q.それに気が付いたきっかけは何ですか？

A.つい最近のことなんですけど、両親が旅行で一週間ほど家を空けたということがあ  
ったのです。誰もいないので、どうしても私が家事をやらなければいけなくなったのです  
けれど、最初はすごく不安でしたが、何とかやり遂げることができたのです。

**Q.それは、重島さんにとって自信につながりますよね。**

A.はい、それまでは自分ですることといえば、お弁当づくりと食事の後かたづけぐらいでした。お弁当だったら、自分が朝早起きさえすればいいし、食事の後かたづけも、どれだけ時間をかけても誰にも迷惑がかからないですよ。でも、両親が留守の間に、自分でやらざるを得ない状況になって、私もやればできるのだということがわかりました。

**Q.そうですか。何だか、重島さんの前向きな気持ちが伝わってきますよ。**

A.今まで何もできないと、あきらめ、両親に甘えていた気持ちにさようならして、これからできることを何かしてみようと思っています。急には無理かも知れませんが、とりあえず自分の夕食を作ろうと思っています。そのうち、家族の食事を用意して上げられたら、いいなあと思っています。

**Q.それだったら、忙しいご両親も大喜びですよ。**

A.そうですね。まずはこの家で自立することが、私の今の目標なのです。

**Q.そうですか。重島さんのこれからの取り組みによって、新しい可能性が生まれて来るんじゃないかと思います。これからも頑張ってくださいね。重島さん、ありがとうございました。**

A.ありがとうございました。

**Q.ところで、重島さん、お弁当づくり以外にも、何か料理づくりにも挑戦しているということですが？**

A.はい、煮物とかはちょっとだけ作れるようになったのですが、揚げ物とか、フライとかを作りたいと思っています。

**Q.油とかを、ちょっと取り扱いを注意しないと。**

A.ちょっと、怖いので。最終的な目標なんですけど、冷蔵庫にあるものを見てパッパ、パッパと作れるようになりたいと思っています。

**Q.良い奥さんになれたらいいですね。頑張ってください。今日は「ほほえみの会」の重島和枝さんと一緒にお送りしてきました。**

・辻 英子さん

Q. 辻さん、こんばんわ。

A.こんばんわ。

Q.、早速なんですけど、辻さんはお仕事のことについてお話ししてくれるということですが、今はどんなお仕事をされているのですか？

A.はい、会社では営業事務の仕事をしています。私が担当していることは伝票を書いたり、電話を受けたりというような事務的な仕事なのです。

Q.会社の中でのデスクワークを中心とした仕事をしているのですね。

A.そうです。でも、事務といっても外に出かけて行かなければならない仕事もあります。

Q.例えば、こういった仕事ですか？

A.そうですね。市役所に書類を提出しに行くこともありますね。

Q.会社から市役所まで近いのですか？

A.いいえ、車で30分ぐらいの所です。私は車の免許を持っていないのでバスで行くしかありません。

Q.車の免許を取る予定はないですか？

A.それが、時々発作を起こす病気を持っているので免許を取れないのです。それと胸の病気で身長が130センチぐらいしかないので、バスのステップの乗り降りが大変なのです。あと、バスで行くとなると時間まで待ったり、いくつも乗り継いだりと結構時間もかかるのです。

昔は何とか、自分で行っていたのですが、最近は同僚にお願いして手の空いている人に行ってもらっています。そうすれば、早く行けて無駄な時間を費やすことなく、会社にとっても効率的ですよね。

私ができないことは誰かに変わってもらうことの方が、結果的には周囲に迷惑をかけることなくすむのです。

Q.ふうん、とても前向きな考えですね。

A.そういうわけではないのですが、自分のできること率先してするようにしています。例えば、お客さんへのお茶出しです。私の会社は給湯室が1階で応接室が2階にあるので、階段を上らなければいけないのです。多少時間がかかるのですが、お客さんが少ないときはお茶出しをするように心がけています。

それともう一つ、どんなときでも、後片づけは率先してするようにしています。お客様が飲み終わったものなら、お茶碗も軽いし、こぼす必要もありませんから。

Q.後片づけは陰の仕事なので、お客さんからの感謝の言葉もありませんよね。だけど、それを率先してやろうとするその心がけは、大変素晴らしいですね。

A.そうですか。でも、私自身まだまだだと思っています。これからも人の三倍仕事をやる心がけで頑張りたいのです。やりたいという気持ちはあるのだけれど、やっぱりできないということがありますよね。それは誰かにお願いすることにして、その分、自分でできることをたくさん見つけて精一杯やろうと考えているのです。

Q.自分のできることをよく知ったうえで、さらに周囲のことをすごく考えて行動している辻さんに見習うことはたくさんありそうです。その前向きなところを生かしてこれからも頑張ってくださいね。辻さん、ありがとうございました。

A.ありがとうございました。

Q.ところで、辻さん、今なんか頑張らうてやっていることがあると聞いたのですが？

A.「波の会」というてんかんの会で、一人一人が自立を目指して頑張っています。

Q.どういった活動をやっているのですか？

A.バーベキューをしたり、遊びばかりでなく、勉強をしたりしています。

Q.てんかんという病気が世の中の人に正しく伝わるように、広報活動もやっていらっしゃるのですか？

A.はい。

Q.それじゃ、世の中の人に正しく伝わると良いですね。「波の会」の活動を頑張ってください。

## '97つくしのコンサート

## 障害者支援施設 利用者・編集委員

9月7日(日)に、2年ぶりの単独外出をして七尾から列車に乗り、約10年ぶりに富山市のオーバードホールで開催された「'97つくしのコンサート」に参加してきました。

「つくしのコンサート」は昭和54年から62年まで連続9回開催されてきました。それ以後10年間の休暇をしていましたが、今年になり富山県ライオンズクラブの方が「もう一度、あの感動を見たい」という話が持ち上がり、この開催ということになりました。

今回のコンサートは、第一部が各福祉施設のメンバーによる和太鼓、ハンドベル演奏、ロシア民謡のダンスが披露されました。

第二部は過去のコンサートのメモリアル曲が発表されましたが、私もこのコンサートに何回か足を運んでいますので、懐かしく思いながら聞いておりました。

その後、今年の発表曲、8曲が発表されました。以前に応募された方の曲も発表されましたが、ろう学校の高校生が2名も含まれており、時代の流れを感じさせました。

実は私もこのコンサートに応募して発表されたことがあります。なぜ、このようなコンサートに関心を持ったかとの理由は、昭和56年に石川県羽咋体育館で開かれた「羽咋わたぼうしコンサート」です。このコンサートがなければ、この機関紙はなかったと思います。

話は大きくそれましたが、今回のコンサートで本当に感心したのは、手話表現の工夫でした。その詩に合わせた衣装、小道具の懲らしているところにも本当に感心させられました。例えば、「折り鶴」という曲には大きな鶴を使って表現をしたり、寝るときの曲にはパジャマ姿で手話表現をしたりしていました。

最後に私の一番印象に残った詩を掲載します。

### 神様からもらった体

作詞：前田 明美

朝、妹が子供達を叱る声で目が覚める  
男の子3人だから大変だなあ  
私は布団の中でぼんやりと聞いている  
いや待てよ、もし私が障害を持たなかったなら  
今の妹の姿がそのまま私の姿だったかもしれない

誰かが言っていた

「あなたが家族全員の不幸せを背負って  
こういう`体`になったのだ  
だからあなたは家族の役に立っているのだ」と

でも、私はそうは思わない



私は障害のある体をもったからっこそ 他人  
の心の痛みが  
少しだけ わかるのではないだろうか？  
…思いあがりかな？

「何でこんな体に生まれたの？ もっとよい体  
が欲しかった」  
思い通りにならない自分の体が歯崖くて  
口にこそ出さなかつたけど  
幾度そう思ったことかわからない  
けれど今はちがう  
自由な体で神様を知らずに 自分の罪に気  
づかず  
生きるよりも  
この不自由な体で 神様を知り 自分のお  
ろかさにも気付いた  
ああ…私は幸せ者です 神様この体をあり  
がとう  
私は幸せ者です 神様この体をあり  
がとう  
ありがとう  
ありがとう

## 編集後記

読者の皆さん、お変わりございませんか？

長い間、発行を休んでいる間に、大きな事件が次々と起こっています。特に、皆さんが驚いたのは神戸の中学生による連続殺人事件だと思います。

この事件の背景にあるものは何でしょうか？学力主義、学校に問題があるとか、社会が悪いなど、すべて誰かに責任を押しつけるようなことをばかりが騒がれています。しかし、それでいいのでしょうか。

「H S K季刊わたぼうし」の発行が途絶えていましたが、今回よりページ数を減らし、内容を濃く(?)していきたいと思っていますので、ご協力をお願いします。(Z.0)

「うん、我が家の食卓にいつくるのだろう？」